

## アクティブからパフォーマンスラーニングへ -身体とこえとことばを体験する-

仙石桂子 ・ Gehrtz 三隅友子  
(四国学院大学) ・ (徳島大学国際センター)

### 1. はじめに

近年、教育や研修にインプロ (impro, impro) = 即興劇をとり入れる機関や組織が増えている。インプロは、脚本も設定も役も決まらない中で、その場で浮かんだアイデアを参加者が受け入れあい、膨らませながら物語を作り、場面を演じながら作っていく演劇活動である。身体的コミュニケーションを使ったこの手法が、組織や個人の日常を揺さぶり、変化のきっかけを作ることが効果として脚光を浴びている。予測不可能な社会に必要な他者との関係づくり、そしてコミュニケーションの手法であるこのインプロを参加者とともに共有することを目的とする。(インプロについては次頁資料を参照のこと。)

### 2. なぜ教育にインプロを？

なぜ教育にインプロ導入を勧めるのかの問いに関しては以下の5つを答えとする。

- ① 教育の二つのねらいに適している
- ② ケア概念が保たれる
- ③ コミュニケーションを再考できる
- ④ 心と身体とこえの感覚を取り戻す
- ⑤ 個人から全体の「学び」を体感できる

これらは、筆者らがそれぞれの立場(演劇指導/日本語教育)で実践しながら得たものである。

### 3. 実践例-まほろば国際プロジェクト-

昨年に引き続き演劇的知を導入したプロジェクトワーク型の教育活動を「日本事情Ⅰ・Ⅱ」「異文化交流から学ぶグローバル化(前期)」「異文化交流体験から何を学ぶか(後期)」(いずれも共通教育開講科目)と日本語教授法関連の授業にて実施している。留学生対象の日本語と日本文化を学ぶことを目標とする一方、日本人学生が異文

化を体験的に学ぶことを目標とする授業の協働連携のスタイルをとった活動である。2013年度から3年に渡って美馬市脇町劇場オデオン座にて留学生と日本人学生の協同学習の成果として、演劇作品を上演するにいたった。これは演劇の成果を広く一般に公開することを目指す、シアター教育である。がしかし多くの場合は演劇的知を学びのプロセスに取り入れて実施するドラマ教育の方がそれぞれの教育活動に組み込みやすいと考えられる。まほろば国際プロジェクトに関しては、<http://www.isc.tokushima-u.ac.jp/caravan/>のPLAN2を参照のこと。

### 4. 広く教育活動で取り入れ実践する可能性

前述3の例は言語教育及び異文化理解教育での実践である。それぞれの教師の学習(学び)のねらいがあり、そこに辿り着くためにインプロを導入しながら、共通の目標を確認し、さらに個別の目標を達成しているかを常に自らに問うている。またこれまでの実践を経て、受講者の学生ら(留学生と日本人学生)からは、表現の手段としての「身体」「こえ」と「ことば」の関わりに気づき、表現する自分の可能性が広がったという評価を得ている。「知識やことば」とともに「身体とこえ」を確認することと、パフォーマンスラーニングを自らの実践になぜかつどのように取り入れるかを参加者とともに考えたい。本ワークショップは、昨年に続き、ウォーミングアップの後、いくつかのインプロ活動を全員で体験し、最後にはソシオドラマの手法を使って、参加者が新たに展開したいと考える教育活動を見える形にすることを試みる。さらに活動を振り返り、個人と全体で互いの発見をすり合わせることも行う。

**資料：インプロヴィゼーション とキース・ジョンストン****インプロとは？**

＜英語のインプロヴィゼーション（improvisation：即興）という詞が省略されてできた言葉。俳優たちが脚本も、設定も、役も何も決まっていな中で、その場で出てきたアイデアを受け入れ合い、ふくらませながら、物語をつくり、シーンをつくっていく演劇である。＞

**1. ジョンストンについて**

1933年イギリス南部のブリクサムで生まれる。11歳の時に文字や数字を記憶することが困難になり、学校に適応できなくなる。図書館での独学の後18歳でロンドンに出て、美術教師となる。赴任先の小学校で問題児の学級を担当し適応できないとされる子供たちに驚くべき能力を発見する。その後、知り合いの紹介で戯曲の執筆に関わる。劇作家グループの非生産的な議論をよそに、議論よりも実際に演じてみることを行い、これがインプロとなった。演劇学校での指導の中で授業を超えて稽古場での参加者の笑いと面白さがインプロ劇団を作るまでになる。世界各地でインプロを教えながら、活動の場をカナダへと移しカルガリー大学を経て、インプロの創始者として、開発したゲーム、エクササイズ等をもとに現在でも世界でワークショップを行っている。

**2. ジョンストンのインプロの方法論 と3. ジョンストンの教え方の特徴**

大人を「萎縮した子ども」と考え、そもそもすべての人がもっている創造性をよみがえらせることを目指す。この創造性の中で、自然発生(spontaneity)と想像(imagination)の二つのキーワードを用いる。大人になると自然発生は、社会的こころ(Social mind)によって抑制されてしまう。以下にあげる恐れが自然発生を抑えるとしている。

**①失敗への恐れ ②評価への恐れ ③未来・変化への恐れ ④見られることへの恐れ**

これらの抑制に対応するために、ジョンストンは「ふつうにやる・がんばらない・独創的にならない・あたりまえのことをする・賢くならない・勝とうとしない・自分を責めない・想像の責任を取らない」と言う。検閲が奥に引っ込む。

**4. ゲームの例 (さしすせそ禁止ゲーム/ワンワード/次、何をしますか?)****5. 教えるときの工夫 と 6. 学び場作り****①カリキュラム ②教師の態度 ③教師と生徒の権力関係 ④段階の進め方 ⑤逆の教え方****7 ジョンストンの本**

・ Impro: Improvisation and the Theatre(1979) ・ Impro for Storytellers (1999)

**<まとめ> インプロとは**

主目的： 人がもともともっている創造性や表現力を引き出す

理論の特徴： 自由な創造性や表現力を検閲する恐怖をなくしていく

方法論の特徴： ゲームを中心として、ストレスのない学びの空間で学ぶ

『ドラマ教育入門<キース・ジョンストン>』高尾隆著 76-86頁を発表者らがまとめて引用